No. 81
2023. 春

世田谷文学館ニュース
SETAGAYA LITERARY MUSEUM NEWS

巻頭エッセイ
「罪を憎んで、人を憎まず」
亀山郁夫（世田谷文学館　館長）

石黒亜矢子《妖精学校》2022年

2022年度　世田谷文学館展覧会事業報告
収蔵品紹介　椎名麟三関連資料

罪を憎んで、人を憎まず

世田谷文学館館長
亀山　郁夫

世界終末時計の針が、「人類滅亡まで過去最短」の残り九十秒を指している。三年ぶりの更新は、いうまでもなくロシアによるウクライナ侵攻が第一の理由だが、世界的な異常気象も大きなファクターをなしているらしい。そうはいえ、「人類滅亡」というこの不吉なひと言も、ウクライナからはるか遠く隔たった日本では他人事のような響きをもつ。戦争は、今後一、二年、いや、それ以上続くと見られているが、正直のところ、どの予測もあてにはできない。状況の悪さは、一切の対話の芽が潰されていることにある。いや、対話を成り立たせる条件が、まったくといってよいほど失われてしまった。対話がなければ、あとはそれぞれの国のメンツをかけた血みどろの戦いが残るだけだ。私は時としてこんな空想にかられる。ウクライナ悲劇の台本は、すでに書き上げられていて、それぞれの国の指導者たちはたんに、自分に割りふられた役割を必死に演じているだけなのではないか、と。私たちが現に立ち合っているのは、シェークスピアの劇でいえば、三幕一場（「あるべきか、あらざるべきか、それが問題だ」）。けっして悲観的すぎる見方ではないと思う。

六十年近くロシア文学に接してきた私にとって、二〇二二年は、まさに針の筵のうえで過ぎた二年だった。愛するわが子が、途轍もない罪を犯してしまった、しかし子への親の愛は、変わらない。そんな複雑な心境である。罪を憎んで、人を憎まず、という孔子の言葉が、こういう心境の説明に役立つことに改めて気づかされた。それでも苦しみの原因となるロシアの非業に、翻弄される日々が続く。とくに苦しいのは、ウクライナの人々の嘆きは理解できても、「憎悪」の正体をリアルに追体験できないことだ。憎悪を感じ、わが子への愛を捨てることができたらどんなに楽か、とさえ思ったことも何度かある。

そんなある日、ストア派の哲学書を読むことを思い立った。アントン・チェーホフに倣ったのだ。二十代半ば、結核への罹患を知ったチェーホフは、死の不安を逃れるためにマルクス・アウレリウスの『自省録』を集中的に読んだ。私自身も、チェーホフ研究の一環として三十代半ばにこの本に親しんだことがあった。そこで冒険心を起こし、今度は、セネカの『人生の短さ』に挑戦することにした。「人生百年」と呼ばれる現代に、この本が広く人気を博している理由を知りたかったこともある。

ストア派の哲学者にとって「幸福」とは、デカルトが定義する「精神の完全な満足と内面の充足」にある。「真の閑暇」を求めて、「過去の哲人」たることをよしとしたセネカは、過去への沈潜を説き、穏やかに生きることの価値を次のように唱えた。

「過去というわれわれの時間の部分は、神聖で特別なものだ。それは、人間世界のあらゆる偶然性を超越し、運命の支配がおよばない。（……）過去は、なんの心配もなく、永遠に所有することができる」（「人生の短さについて」）

「過去」を永遠に所有すること――何というすばらしい言葉だろうか。この一年、私が求めていた救いとは、この動かざる「過去」の「永遠」性にあったのではないか。そしてそのような確信が強まるにつれて、現代のこの悲惨に背を向けつつ、歴史の片隅にひっそりと蹲る芸術家たちの存在がいつになく輝きを帯びはじめた。彼らの多くは、圧政の下に生き、大きな苦しみを嘗めたが、侵略国家の芸術家という汚名だけは背負わずにすんだ。名誉や栄光を当てにすることなく、日々の営みを「机の引き出し」の奥にそっとしまいこむことで芸術家としてのささやかな誇りを保つこともできた。しかるに、今を生きるロシアの芸術家は、デジタルタトゥーをわが身に刻み、世界の人々の白眼視に耐えつつ、「創造」に勤しまなくてはならない。どうすれば、この屈辱から逃れられるのか。そもそも逃げ道はあるのか。スイスに亡命したある作家がある集会の席で放ったひと言が印象に残った。「ロシア文化は領土の呪いから解放された」。ロシアの文化を、独裁者の支配するロシアから切りはなし、この地球上に、新たな、バーチャルな文化国家を建設しようというのである。是非はともかく、愛するわが子を汚名から救いだすべつの手立てが考えだされた。

文化と領土の分断は、市民と国家の分断をも同時に意味する。ロシアの心ある芸術家たちの多くがいまは沈黙を守っている。むろん、記憶に沁みついた恐怖の遺伝子も沈黙の理由の一つだろう。しかし、それだけではない。彼らは、いま国内で進行しつつある、まさに文化と領土の分断という驚くべき現象を注視しつつあるのだ。一種の国内亡命。そして彼ら亡命者が、魂の糧とするのは、いうまでもなく、過去。「なんの心配もなく、永遠に所有することができる」過去が、今やバーチャルな文化国家と一体になろうとしている。願わくば、過去への沈潜を介し、ロシア人の心に、文化と文明への新しい視座が生まれんことを。そして何よりも世界にいち早く「真の閑暇」が訪れんことを……。

企画展のご紹介

石黒亜矢子展
ばけものぞろぞろ ばけねこぞろぞろ

2023年4月29日［土・祝］～9月3日［日］
2階展示室

化け猫や妖怪、想像上の生き物を、日本画を想起させる流麗な筆致で描きだす絵描き・石黒亜矢子。

石黒さんの描く生き物たちは色彩豊かに美しく愛らしく、ユーモアたっぷりで、ときにちょっぴり不気味な表情をたたえて瞬く間に私たちを異世界へと誘います。

初の大規模個展となる本展では、画業の最初期の妖怪絵をはじめ、『いもうとかいぎ』『えとえとがっせん』『ねこまたごよみ』などの絵本原画を中心に、本展描きおろしの新作約20点を含む500点あまりを展示。今井昌代さんとの特別コラボ展示、雅太郎玩具店の新作コラボ作品にも注目です。

石黒さんの描く魑魅魍魎（ちみもうりょう）が跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）するあやかしの世界をお楽しみください。

『いもうとかいぎ』ビリケン出版 2016年

石黒亜矢子（いしぐろ・あやこ）

1973年、千葉県生まれ。絵本作家・絵描き。
化け猫や妖怪などを主題に国内外で個展を開催。絵本作品に『ばけねこぞろぞろ』（あかね書房）、『いもうとかいぎ』（ビリケン出版）、『どっせい！ねこまたずもう』（ポプラ社）他。2016年、玄光社より画集『石黒亜矢子作品集』出版。愛猫家としても知られ、猫を溺愛しつつ爬虫類にも夢中。

本展メインビジュアル《地獄十王図》2022年

◆チケット情報

本展はオンラインチケットおよび当日券を販売いたします。

＊関連イベントの詳細については、決まり次第当館HPにてお知らせいたします。
＊観覧料や開館時間等の施設ご利用情報は、8頁をご覧ください。

資料受贈報告
――2022年7月2日～2023年1月6日

▼秋田稔様　臼田捷治様　大重道子様　楠戸まさる様
佐々木繁人様　四宮義正様　島田菜穂子様　塚田優様
新津紅様　吉原家様

▼尼崎芸術文化協会　石川県立美術館　市川市文学ミュージアム　一茶記念館　井上靖記念文化財団　茨木市立川端康成文学館　射水市大島絵本館　いわき市立草野心平記念文学館　愛媛県生涯学習センター　大磯町郷土資料館　大阪国際児童文学振興財団　かごしま近代文学館・かごしまメルヘン館　神奈川近代文学館　軽井沢高原文庫　北九州市漫画ミュージアム　久喜市立郷土資料館　黒澤明研究会　慶應義塾大学アート・センター　高知県立文学館　郡山市こおりやま文学の森資料館　古賀政男音楽博物館　国立国会図書館国際子ども図書館　高志の国文学館　小諸市教育委員会　埼玉県立近代美術館　斎藤茂吉記念館　山頭火ふるさと館　実践女子大学文芸資料研究所　昭和女子大学光葉博物館　高遠書房　たましん地域文化財団　田山花袋記念文学館　沖積舎　千代田区立日比谷図書館文化館　帝国データバンク史料館　東京都教育委員会　徳島県立文学書道館　中原中也記念館　日本現代詩歌文学館　日本児童ペンクラブ　日本歌人クラブ　日本トルストイ協会　沼津市芹沢光治良記念館　野村胡堂・あらえびす記念館　俳人協会　長谷川町子美術館　パナソニック汐留美術館　姫路文学館　風花随筆文学賞実行委員会　福崎町立柳田國男・松岡家記念館　ふくやま文学館　藤沢周平記念館　ふらり　文学座　文京ふるさと歴史館　松山市立子規記念博物館　岬の分教場保存会　三鷹市美術ギャラリー　宮沢賢治学会イーハトーブセンター　武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館　武者小路実篤記念館　森鷗外記念館　山梨県立文学館　やまなし文学賞実行委員会　郵政博物館　横浜市史資料室　与謝野晶子倶楽部　吉村昭記念文学館　立教学院展示館　立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター　林泉書荘　論創社

▼「大岡信研究」「海」「海紅」「経堂雑記」「空想カフェ」「くさくき」「群系」「原型富山」「鴻」「心の花」「埼東文学」「佐佐木信綱研究」「鹿首」「春耕」「正午」「抒情文芸」「詩霊」「駿河台文芸」「川柳研究」「双鷺」「蠻」「たね」「短歌人」「地中海」「となりあふ」「飛火」「富山県歌人」「風」「プチ★モンド」「文藝軌道」「本のパーキング」「窓」「茂吉断片」「ランブル」「りんごの木」「暦日」
（五十音順・団体名敬称略）

月に吠えよ、萩原朔太郎展

2022年10月1日(土)～2023年2月5日(日)
2階展示室

日本の近代詩を代表する詩人、萩原朔太郎（1886～1942）。朔太郎は1931年に下北沢に移住し、翌々年に自ら設計して建てた代田の家を終の棲家としました。当館では2011年に「生誕125年 萩原朔太郎展」を開催していますが、没後80年を記念して全国で横断的に開催された「萩原朔太郎大全2022」の一環として、当館でもこの不世出の詩人にあらためて光を当てました。

朔太郎は第一詩集『月に吠える』の序文に、「人は一人一人では、いつも永久に、永久に、恐ろしい孤独である」と書いています。近代日本のもっとも偉大な詩人の一人である朔太郎は、きわめて孤独な寂しい人物でもありました。学校に居場所がなく、本や音楽を通じて未知の世界に憧れた少年期から、故郷を離れた東京での家庭生活が崩壊し、再び帰郷を余儀なくされた成年期まで、朔太郎の人生には寂しさの影がつきまといます。本展では、朔太郎の「孤独」を導きの糸として、その生涯と遺された資料、さらに朔太郎の詩を新しい形で表現した現代のアーティストたち（版画家の金井田英津子、漫画家の松本大洋、清家雪子、ヴァーバル・アート・ユニットのTOLTA、自動からくり人形作家のムットーニ）の作品などを、一冊の「本」を読み進めるように辿る会場構成としました。朔太郎は先の引用箇所に続けて、人間同士に共通するものを発見するとき「我々はもはや永久に孤独ではない」と書いています。本もまた、孤独な読書を通じて、時代を超えて多くの人間を結びつけるものといえます。

没後80年を経た詩人の展覧会にも関わらず、会場には若年層を含む数多くの方にお越しいただきました。来場者からのアンケートでは、朔太郎の心情に共感したという人、体験型の展示物や会場の空間デザインを楽しんだ人が多く、「朔太郎の世界を今様に解釈する試みが面白かった」「今を生きる人と朔太郎をつなぐ素敵な空間でした」といった感想が寄せられました。

なお本展に関連して、世田谷区立池之上青少年交流センターと共催で8月にワークショップ「猫町フラッグをつくろう」を実施しました。小学生から若者まで40名に描いてもらった猫の絵はフラッグにして、11～12月に下北沢駅周辺の各商店街に掲出しました。館内のこども向け企画として12月～会期終了まで設置したダンボール迷路「猫町ラビリンス」でも、ワークショップ参加者の猫の絵を使わせていただきました。

また、本展にあわせて「移動文学館」事業の新規バナー「詩人・萩原朔太郎」を制作し、館内1階で展示しました。次年度より区内外の施設での出張展示を開始いたします。

会場入口　撮影：淺川敏

会場内風景　撮影：淺川敏

ムットーニ作品ゾーン　撮影：淺川敏

出張展示バナー「詩人・萩原朔太郎」

下北沢商店街で掲出した「猫町フラッグ」

こども向けダンボール迷路「猫町ラビリンス」

ヨシタケシンスケ展 かもしれない

2022年4月9日(土)～7月3日(日)
2階展示室

現代日本を代表する絵本作家の一人、ヨシタケシンスケさん（1973－）。2013年刊行のデビュー作『りんごかもしれない』以降、作品を発表するたびに大ブームを巻き起こし、国内外で人気を集めています。日常の小さな疑問から果てしなく広がっていく想像（妄想？）の世界に、子どものみならず大人までもついつい引き込まれてしまうのです。

ヨシタケさん初の大規模個展となる本展では、その独創的な発想の源を探るべく、「ヨシタケシンスケの頭のなか」をイメージして構成しました。約30年分のアイディアスケッチのなかから2,000枚を複製して壁一面に貼り巡らせたり、小さな紙に書かれた絵本の構想メモを何倍にも拡大したり。さらに学生時代の立体作品やヨシタケさんの「好きなもの」をアトリエからたくさんお借りして、会場のあちこちに展示しました。

なかでも人気だったのが、ヨシタケさん自ら考案したアトラクションの数々です。絵本『ふまんがあります』にちなんだ《うるさいおとなをりんごでだまらせよう！》は、叱る親や怒る上司の口にりんごを放り入れると、おいしくて幸せな顔になって黙ってしまう、という楽しい仕掛け。また、絵本『このあとどうしちゃおう』の世界をイメージした《じごくのトゲトゲイス、てんごくのふかふかみち》は、尖った突起が沢山出ている地獄の椅子に座ったり、ふわふわした素材の天国の道を歩くことが出来るというものでした。これらは、展覧会に来ている人たちの笑い声や叫び声も、展示の一つとして楽しんでほしいというヨシタケさんの思いから具現化したものです。

そして会場の最後には、描き下ろしメッセージとともに、「あなたのみらいはこれかもしれない！」というくじ引き占いが。ヨシタケさんの作品世界を全身で体感しながら、自分自身の可能性（「かもしれない」）についても思いめぐらすことができる展覧会となりました。

撮影：黒澤義教

漫画家・山下和美展 ライフ・イズ・ビューティフル

2022年7月30日(土)～9月4日(日)
1階文学サロン　＊シーズン展示

『天才 柳沢教授の生活』『不思議な少年』など、多彩な作風で幅広いファンを持つ漫画家・山下和美さん（1959－）。2021年、世界と断絶した山村を舞台にしたSF長編『ランド』で、第25回手塚治虫文化賞マンガ大賞を受賞しました。数寄屋造りの自宅建設について綴った『数寄です！』シリーズや、大正時代の洋館の保存活動をめぐる『世田谷イチ古い洋館の家主になる』といった、世田谷を舞台にしたコミックエッセイでも知られています。

本展では、それら代表作に最新作『ツイステッド・シスターズ』を加えた6作品の原画を展示。あわせて、柳沢教授のモデルとなった父や、漫画家だった姉たちなどの資料、幼少期からデビュー前の作品も初公開。少女漫画時代のカラー原画などを含めた約150点の展示資料で、山下和美さんの作品世界に迫りました。

撮影：須藤正男

収蔵品紹介

椎名麟三関連資料

椎名麟三

戦後派を代表する作家、椎名麟三（1911～73）。椎名は戦後に活躍した作家の一人です。彼は姫路中学時代、別居して大阪で愛人と暮していた父親のもとへ生活費の交渉に行きますが、追い返され、そのまま家出。母の待つ家には戻らず、中学を中退しました。

見習いの料理人などを経て、椎名は宇治川電気電鉄部（現・山陽電気鉄道）の車掌となります。そこでは、労働運動に身を投じ、共産党に入党します。その後、検挙され、約二年間の獄中生活を経験しました。獄中では、ニーチェの著作を読み、その思想を知ります。いわゆる「転向」を表明し、出所。鉄工会社などに勤めますが、ドストエフスキーの『悪霊』に出会い、文学を志します。こういった境遇は「神の道化師」や「自由の彼方で」といった小説にも投影されています。

椎名は戦前の1944年より世田谷区松原に居を移しました（～没年まで）。終戦後、千歳烏山駅の近くに、同人仲間の船山馨と「創美社」という出版社を創設しますが、半年ほどで廃業しました。その後の1947年に小説「深夜の酒宴」が筑摩書房の文芸誌「展望」に掲載され、小説家としての道を歩みはじめました。椎名の実存主義的な作風は、これまでの思想や価値観が打ち壊された戦後の文壇に新風を吹き込みました。

当館には椎名麟三の草稿や講演メモといった自筆資料が収蔵されています。それらの多くはノートに書かれており、細やかな文字が罫線の上に端正に並んでいます。「俺はガリ版の筆耕屋をやってたからこんな字が書けるんだ」と椎名が語っていたことを、同じく戦後派の作家仲間である埴谷雄高が回想しています（はじめの頃の椎名麟三）。

彼の代表作である『永遠なる序章』の草稿ものこされています。『永遠なる序章』は、死を宣告された復員兵が、余命わずかな中で生を模索するという筋書きで、主人公の他にも、貧しく苦しい生活の中で、それでも生きて行く人々の姿が描かれています。数々の職業を転々とし、貧困層の人々と暮らしをともにしてきた椎名の経験が反映されているといえます。

また、講演メモも数多くのこされています。箇条書きの形で記されたものもありますが、そのほとんどが「～であります」と口述の通りに書かれており、入念な準備をして、講演に臨んでいたことがうかがえます。

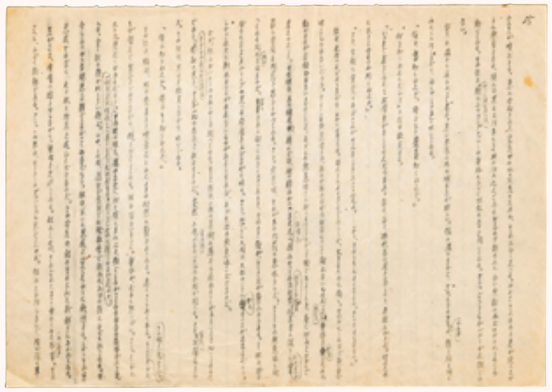
講演メモのなかで、たびたび目にするのが「ほんとうの自由」という言葉です。「作家と生活」と題した講演メモのなかで、椎名は自身の境遇を振り返りながら、次のように述べています。

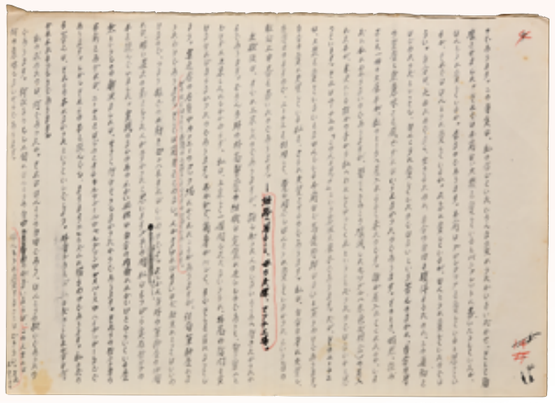
「私の求めたのは、何であったか。それはほんとうの自由であり、ほんとうの救いであったのであります。何故ならもし人間にほんとうの自由がないならば、ほんとうに愛することはできない。それだけでなくこの人生には何の意味もないからであります。」

苦境のなかで少年期を過ごし、獄中で実存主義に触れた椎名にとって、「ほんとうの自由」は永遠のテーマでした。1950年、椎名は洗礼を受け、キリスト教に入信しますが、その信仰は「ほんとうの自由」「ほんとうの救い」と無関係ではありませんでした。そして、彼の文学にとっても例外ではなく、**「将来、真の文学が成立するならば、それは真の自由を視点とする文学であるだろうということなのであります」**（講演メモ「文学の視点」「大阪文学学校での講演、のちに「指」1964年1・2月号に掲載）とも述べています。

2023年度のコレクション展では「椎名麟三」と『あさって会』」と題し、収蔵品とともに椎名麟三の人と作品を辿ります。また、同じく松原に住んでいた作家・梅崎春生（1915～65、居住年1947～55）をはじめとして、戦後派の交友会「あさって会」の作家たちをあわせてご紹介いたします。

＊展覧会情報は、8頁をご覧ください。


「永遠なる序章」草稿


講演メモ「作家と生活」

2022年度コレクション展事業報告

「モノ」にまつわるそれぞれの物語

世田谷文学館開館25周年記念
セタブン大コレクション展　PARTⅡ

「山ありてわが人生は楽し」

2022年4月9日（土）～9月11日（日）

2021年10月から開催した「開館25周年記念　セタブン大コレクション展」の第2期として、10万余点の収蔵品の中から特色あるコレクション約220点で構成しました。比較的年代の新しい作家の資料を中心に、収蔵品の一角を成すミステリ関連、映画関連のコレクションも加え、それぞれの資料にまつわるエピソードをご紹介しました。

学生時代から作家を志していた遠藤周作が学友に贈った初期創作ノート、横溝正史の『本陣殺人事件』連載第1回の感想を伝える盟友江戸川乱歩の書簡、成瀬巳喜男監督の多くの書き込みが残る日本映画不朽の名作『浮雲』の撮影用台本、黒澤明監督が『七人の侍』のキャラクター像をスタッフと共有するために描いたスケッチ画、瀧口修造が自宅のオリーブの実を瓶詰にして親しい友人に贈った時のラベル、井上ひさしが女子中学生にあてた『ひょっこりひょうたん島』ファンレターへの返信などなど、「モノ」たちが背負っているひとつひとつの「物語」を掘り下げ、展覧会としてお見せする初めての試みとなりました。

「下北沢猫町散歩」 撮影：澤木亮平

世田谷文学館開館25周年記念　セタブン大コレクション展　PARTⅡ
「山ありてわが人生は楽し」 撮影：須藤正男

〈まち〉を形づくる人びとの記憶

「下北沢猫町散歩」

2022年10月1日（土）～2023年3月31日（金）

下北沢で晩年の10年間を暮らした詩人・萩原朔太郎の没後80年を記念する企画展「月に吠えよ、萩原朔太郎展」の関連企画として開催しました。展覧会タイトルは朔太郎が下北沢時代に執筆した小説『猫町』にちなんでいます。主人公が自宅周辺を散歩するうちに幻影の町「猫町」に出くわしてしまうという作品の成立には、迷路にも似た下北沢の街並みも影響しているかもしれません。

東京近郊の農村から新興住宅地へ、そして演劇・音楽の町、若者の町へと下北沢がめまぐるしい変貌を遂げたこの百年の間に、ほかにも多くの作家が出逢った風景をそれぞれの作品に書き留めてきました。武蔵野の原野で教え子たちと遊んだ坂口安吾。自宅を新築したのもつかのま、パートナーと別れてしまう宇野千代。夜半の空襲下、二人の子どもたちだけは助けたいと願った横光利一。古びたアパートの一室を豪奢な宮殿に見立てた森茉莉。下北沢での古書店開業を夢見た植草甚一。下北沢で育ち、華やかな作家生活のほとんどをこの地で過ごした森瑤子……。

近年は吉本ばななや藤谷治、又吉直樹といった作家たちが下北沢を舞台に、ここを訪れここに棲む人びとの悩みや喜びを作品に描いています。本展では、作家たちが作品に記録した人生の諸相もまた〈まち〉を形づくる記憶の一部ととらえ、借用資料も加えてコレクションともにたどりました。

『猫町』は、見慣れた景色の「秘密の裏側」がテーマになっています。写真家・澤木亮平さんには下北沢をよく知る人でも見た事のないような、しかし確実に存在している風景を撮り下ろしていただき、会場全体に散りばめました。

新しい試みとして会場内には巨大な「私のシモキタMAP」を設置。来場者のみなさんに下北沢での思い出をフセンに書いてもらい該当箇所に貼っていただきました。多くの来場者がご協力くださり、会期の終わりには文字通り、人びとの記憶の集積した世界に一つだけの地図が出現しました。

年間のご報告にあたり、貴重な資料をご寄贈くださったみなさま、そのほかさまざまなご協力を賜りましたみなさまには、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

世田谷文学館カレンダー　2023年4月～9月

＊5月10日(水)は「国際博物館の日・5/18」を記念して入場無料
＊5月12日(金)は65歳以上の方は入場無料
＊掲載の催事は変更や延期になる場合があります。
　ご確認の上お出かけください

企画展

石黒亜矢子展
ばけものぞろぞろ　ばけねこぞろぞろ

2023年4月29日[土・祝]～9月3日[日]

観覧料：
一般1,000(800)円
65歳以上・大学・高校生600(480)円
小・中学生300(240)円
障害者手帳をお持ちの方500円
　(ただし大学生以下は無料)
※(　)内は団体割引・「せたがやアーツカード」割引料金

チケット情報
石黒亜矢子展では、当日券および
オンラインチケット(日時指定券)を販売します。
詳細はオンラインチケットサイト
(https://e-tix.jp/setabun/)をご覧ください

『ねこまたごよみ』
(ポプラ社刊 2021)

『どっせい！　ねこまたずもう』
(ポプラ社刊 2018)

シーズン展示

2023年「石黒亜矢子展」関連・シーズン展示
「どっせい! ねこまたずもう ～夏場所～」

2023年7月22日[土]～8月31日[木]

観覧料：無料

2023年4月 石黒亜矢子展　ばけものぞろぞろ　ばけねこぞろぞろ　2023年4月29日～9月3日
5月 没後50年・椎名麟三と「あさって会」　2023年4月22日～9月3日
6月 同時開催　ムットーニのからくり劇場
7月 2023年「石黒亜矢子展」関連・シーズン展示「どっせい！ねこまたずもう ～夏場所～」　2023年7月22日～8月31日
8月
9月

コレクション展

没後50年・椎名麟三と「あさって会」

2023年
4月22日[土]
～9月3日[日]

椎名麟三

観覧料：
一般200(160)円
高校・大学生150(120)円
65歳以上・小・中学生100(80)円
※(　)内は団体割引・「せたがやアーツカード」割引料金

同時開催　ムットーニのからくり劇場

Special Exhibition

Ayako Ishiguro Exhibition: Magical Monsters Parade

Exhibition period: Apr. 29 (Sat.) – Sept. 3 (Sun.)

Admission fee: General 1,000 (800) yen, Students (University, High School) / Seniors (Over 65) 600 (480) yen, Students (Junior High, Elementary School) 300 (240) yen
※Group discounts・Setagaya Arts Card discounts in parentheses

Ticket Information
Same-day tickets and online tickets (fixed date & time) will be sold for the Ayako Ishiguro Exhibition.
For details, please see the online ticket site: https://e-tix.jp/setabun/

Season Exhibition

Dossei ! Nekomata Sumo – Summer Tournament (in connection with Ayako Ishiguro Exhibition)

Exhibition period: July 22 (Sat.) – Aug. 31 (Thu.)
Admission free

Permanent Collection

Collection Exhibition: Marking the 50th Anniversary of Death: Rinzo Shina and the “Asatte Kai”

Simultaneously held: Muttoni’s Puppet Theater

Exhibition period: Apr. 22 (Sat.) – Sept. 3 (Sun.)

Admission fee: General 200 (160) yen, Students (University, High School) / Seniors (Over 65) 150 (120) yen, Students (Junior High, Elementary School) 100 (80) yen
※Group discounts・Setagaya Arts Card discounts in parentheses

ご来館にあたってのお願い

当館では新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、換気を含めて衛生管理を徹底させ、会場運営を行います。お客さまにおかれましては、次のことへのご協力をお願いいたします。

- 感染症対策のため、混雑時は入場を制限させていただきます。
- 37.5℃以上の発熱のある方は入館をお断りします(入館時に検温させていただきます)。
- 咳、咽頭痛等、風邪のような症状がある方。体調がすぐれない方はご来館をお控えください。また、咳・くしゃみをするときは、ティッシュやハンカチなどで口や鼻を覆ってください。
- 大きなお荷物でのご入館はお控えください(ベビーカー置き場はあり)。
- 駐車場は利用台数が限られます。公共交通機関のご利用をお願いします。
- マスク着用を推奨します。その他、注意事項の追加・更新がございますのでご来館前に必ず文学館HPをご確認ください。

Safety Precautions when Visiting the Museum

In operating the Setagaya Literary Museum, we take every precaution to maintain hygiene, including ventilation, in order to prevent the spread of Covid-19 infections. We ask visitors for their cooperation in the following.

- As a measure to prevent infections, we limit admission during busy times.
- We refuse admission to those with a fever of 37.5°C or higher. (Temperatures are measured when entering.)
- We ask that you refrain from visiting if you have a cough, sore throat or other cold-like symptoms, if you feel unwell. In the case that you need to cough or sneeze, please be sure to cover your mouth and nose with a tissue or handkerchief.
- Please refrain from bringing large luggage when visiting. (A baby carriage storage area is available.)
- Parking space is limited. Please use public transportation.
- We recommend wearing a mask. Other additions and updates will be made to these precautions, so please be sure to check the museum homepage before visiting.

利用案内

開館時間：10時－18時(展覧会入場は17時30分まで)連携
休館日：毎週月曜日(月曜が祝日の場合は開館し翌日休館)　年末年始

割引料金：企画展・コレクション展ともに団体(20名以上)は2割引
＊団体利用は事前にお問合せください。障害者手帳をお持ちの方は一般料金の半額。
世田谷区内在住在校の小・中学生は、土曜、日曜、祝・休日、夏休期間のコレクション展は無料

交通案内：
京 王 線　「芦花公園」駅南口より徒歩約5分
　「千歳烏山」駅南口より徒歩約13分
小田急線　「千歳船橋」駅より京王バス(千歳烏山駅行)
　「芦花恒春園」下車徒歩約5分

Visitor Information

Opening Hours: 10:00 am to 6:00 pm (last admission 5:30 pm)
Closures: Every Monday (Closed Tuesday when a national holiday falls on Monday)　New Year holidays (Dec.29–Jan.3)
Group Discount: Groups of 20 + visitors will receive a 20% discount on admission fee both collection and special exhibitions.
Disability certificate holders will be admitted at 50% the general rate.
Elementary and junior high school students, who studies or resides in Setagaya city, are admitted free on weekends, national holidays, and during the summer holidays.

Access
about 5-minute walk from Roka-koen Station’s South Exit (Keio Line)
about 13-minute walk from Chitose-karasuyama Station’s South Exit (Keio Line)
about 5-minute walk from Roka Koshunen (take Keio Bus from Chitose-Funabashi Station [Odakyu Line] towards Chitose-karasuyama Station [Keio Line])

公益財団法人せたがや文化財団　世田谷文学館　SETAGAYA LITERARY MUSEUM
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10　1-10-10 Minami Karasuyama, Setagaya-ku, Tokyo 157-0062
Tel. 03-5374-9111
https://www.setabun.or.jp/